

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	鳥栖市立若葉小学校
-----	-----------

1 前年度 評価結果の概要	・昨年度からの取組を生かしながら、1人1台端末を活用した授業改善を進めて12月に授業公開を行った。教師や児童の1人1台端末のスキルも向上し、授業改善につながつているので次年度も活用を進めていく。 ・毎月のアンケートや毎週の職員連絡会を活用し、いじめが起こりにくい集団づくりに継続して取り組み、いじめの早期発見、早期対応、再発防止を心がけ、児童が安心して過ごせる学校づくりを目指していく。 ・児童の主体的な態度に対する承認・称賛を行うため、積極的・継続的に児童が活躍できる場や機会を増やしていく。また、家庭・地域にも連携を働きかけることで多方面からも承認・称賛を行い、児童の自己肯定感を高めていく。 ・来年度は特別支援学級の在籍人数が増える。特別支援学級在籍以外でも、通級教室に通ったり、普通学級で特別な支援を要したりする児童もいる。なお一層の特別支援教育の充実が必要である。そのために保護者の願いに寄り添い、一人一人の教育的なニーズに応じた指導・支援を行っていく。
------------------	---

2 学校教育目標	「美しい心をもち 自分から学び やりぬく子」の育成 ～ 元気いっぱい 笑顔かがやく 若葉っ子 ～
----------	---

3 本年度の重点目標	① 心の教育（道徳、人権・同和教育、学級活動）による豊かな心の育成 ② 若葉授業と家庭学習習慣の定着による確かな学力の積み上げ ③ 誰もが安心して過ごせる環境づくり ④ コミュニティ・スクールの充実
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目										
重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	●全職員による授業力向上に向けた若葉授業等の共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートの成果指標を達成した教師90%以上を目指す。	・全校で共通の学習スタイルと学び方指導を明確にして、全学級で「若葉授業」に取り組む。 ・主体的・多面的に学ぶ力を伸ばすために、各教科の授業の中で児童相互に主体的・対話的に関わりあう「友達タイム」を活用する。 ・家庭学習習慣定着のための啓発、家庭学習推進デーの設定を行い、自ら学習に向かう児童の育成を目指す。 ・校内研究でユニバーサルデザインの視点に基づいた学習環境・授業づくりを目指す。	B	・対話と振り返りを基軸とした「若葉授業」について、研究授業等を参観することで共通理解、共通実践ができつつある。 ・家庭学習習慣定着のための推進週間、推進日を設定している。各学年で家庭学習を充実させるための取組、情報の発信等を行っている。 ・家庭学習推進の取組が学力向上や、自ら学習に向かう姿勢につながっているかどうかは、経年比較や意識調査をしていく必要がある。	A	・全学級において研究授業を実施し、参観し合うことで対話活動(友達タイム)の意義や手立てを職員間で共有することができた。また、授業づくりに対する考え方についても協議を重ねることで、多面的な理解を深めることができた。 ・家庭学習定着のための推進日、推進週間を定期的に実施することで児童及び保護者の意識を高めることができています。 ・教室環境のユニバーサルデザイン化推進を全校共通で実践したり、特別支援学級の公開授業を行うことで合理的配慮について学ぶ機会を得たりすることができた。	A	・評価は妥当である。 ・全国学力・学習状況調査及び佐賀県学習状況調査の結果については学年によってそれぞれ課題があるので、学習の積み残しがないように継続して指導をしてほしい。 ・家庭学習推進デーを生かして、タブレット活用も含めて家庭学習について学校と家庭が協力して実施してほしい。	
	○タブレット端末等を使った授業実践による学力の定着	○タブレット端末を効果的に授業で活用している教師90%以上を目指す。	・タブレット端末を効果的に活用した授業づくりに取り組み、研究授業や公開授業を行っていく。	A	・一人一台端末を活用した授業づくりに取り組み、各学年、各学年部で工夫をしながら、教科等の特性に応じた授業実践ができている。	A	・授業支援ツールの研修を行い、積極的に活用しようという機運が高まっている。90%以上の職員が日頃から活用しており、授業実践の積み重ねが進んでいる。	A	・評価は妥当である。 ・情報モラル講演会を児童だけではなく、保護者にも参加してもらうようにしてほしい。 ・家庭でタブレット端末を使用する際のルールを徹底してほしい。	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○特別の教科道徳の授業で考えたことを生活に生かそうとする児童を90%以上にする。 ○相手が嬉しい、心地良いと感じる言葉や行動について考えることができる児童を90%以上にする。	・道徳の授業の終末に振り返りを行い、実践につなげる。 ・「ほめほめカード」や「がんばったねカード」に自他の良さを見つけ承認、称賛する。学校内だけでなく、地域や家庭にも参加してもらう。 ・「ふわふわ言葉」を学期毎にクラスで考え、目に触れるところに掲示することで、意識して使っていくようにさせる。	B	・授業後の実践につながるように、学年や個人でワークシートを工夫をしている。 ・「ほめほめカード」の紹介を昼の校内放送で行ったり、保護者からの「がんばったねカード」を校内に掲示したりするなど、承認称賛の輪を広げている。 ・各クラスで決めた使いたい「ふわふわ言葉」を、毎学期末に振り返りを行うことで、積極的に使っていくとする意欲付けを行っている。	B	・めあてに対する振り返りを行うことで、達成できていることと課題に気づき、自分を高めていこうとする意欲付けになっている。アンケートでも90%以上の児童が授業の中で考えたことを生活の中でも気を付けていると答えている。 ・クラスの話し合いにより、学期毎に様々な「ふわふわ言葉」を決めていた。毎学期振り返りでは、90%以上の児童が進んで使ったとこたえており、意識して使っていくという気持ちになっている。	B	・評価は妥当である。 ・道徳の授業を充実させて児童の心の教育を推進してほしい。 ・学校評価アンケートでも90%以上の児童が授業の中で考えたことを生活の中でも気を付けていると答えていることは素晴らしい。 ・クラスの話し合いにより、学これから「ほめほめカード」の取組を継続してほしいし、地域においても機会があれば積極的に褒めていきたい。	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめは絶対に許さないという児童の意識、いじめが起こりにくい集団づくりに取り組み、教職員アンケート、保護者アンケートの「いじめの防止に努めている」であてはまると答えた割合が90%以上。	・Q-Uを実施し、その結果をよりよい集団づくりを意識した学級経営に生かす。 ・「いじめ・いのちを考える日」に、児童は毎月、保護者は学期毎にアンケートを行い、個人の悩みやいじめの早期発見・対応を学校全体で取り組む。	B	・Q-Uアンケートの結果を学年間で共有し、指導に生かすことで、学年で子供たちを育んでいこうという構えで学年経営に臨んでいる。 ・毎月のアンケートを通して児童の困り感を把握し、各担任が丁寧に早期対応できている。学級・学年で対応が難しい場合は、管理職を含めた対応を行っている。	B	・保護者アンケート「いじめの防止に努めている」の項目は、90%で目標値に届く程度であった。 ・毎月1回のアンケートを通して、児童の困り感を早期に発見できるようにし、特別支援を含めた学年担任間で共有・相談をした上で協力して指導にあたった。学年だけの対応が難しい場合は、管理職も含めた複数教員で当たる等、組織的なアプローチを行った。	B	・評価は妥当である。 ・いじめの早期発見及び早期対応も大切であるが、いじめが起きないような支持的な風土を学級や学校でつくるのが大切である。	
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・児童生徒の資質・能力を育む授業づくりに関する校内研修等を実施する。 ・各種体験活動では、児童生徒に活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。 ・キャリアパスポートを活用し、将来の夢や目標の実現に向けて計画的に取り組む。	B	・「じんちゃん・けんちゃん」の研修や、ソーシャルスキルトレーニングの研修等を行った。 ・クラスによって振り返りの形式は異なるが、個人のめあてに対する達成度を振り返る機会を設け、努力して自分自身を高めていこうとする意欲付けを行っている。 ・年度当初にキャリアパスポートの意義を児童と共有し、めあて達成に向けて、自分がどんな実践をしたかを見直す機会にしている。	A	・児童アンケートで「自分のことを認めてもらったり、ほめてもらったりすることは嬉しい」と答えた児童はだいたいを含めると98%であった。これからも承認称賛を続けていきたい。 ・児童アンケートで「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童は93.8%であった。 ・めあてに対する振り返りを折りに付け行うことで、達成できていることと課題に気づき、自分を高めていこうとする意欲付けになっている。	A	・評価は妥当である。 ・お互いを認め合う心や思いやりの心を育てることが大事である。地域でも相手がどう思うのかをよく考えて行動してほしい。 ・将来の夢や目標の実現のために積極的にいろんなことにチャレンジしてほしい。	

様式1(小・中)

●健康・体づくり	●運動習慣の改善や定着化	●授業以外で運動やスポーツを行う時間を増やすために、休み時間等で外遊びをする児童を85%以上にする。	・体育委員会で「クラスマッチ」を企画することで、運動をする機会を増やし、より参加人数を増やす。 ・学級で「元気タイム」を設定したり、雨の日には体育館を開放し、学年ごとに遊ぶ日を設定したりすることで体を動かす機会を増やす。 ・リレーカーニバルや水泳大会・なわとび大会などの体育的行事を行い、体力の向上を図る。 ・各クラスがスポーツチャレンジに積極的に参加できるような場の設定をする。	B	・雨の日には、体育館を開放し、「クラスマッチ」を開催した。体育委員会が中心となって企画することができ、体を動かす機会を増やすことができた。 ・リレーカーニバルを企画・実施することで、体力の向上を図ることができた。 ・職員にスポーツチャレンジの告知をすることで、運動への意識を高め、楽しんで取り組める環境作りをした。	A	・休休みに運動場に出て元気に遊んだり、雨の日でも体育館で運動をしている児童が90%を越え、元気に体を動かすことができている。 ・晴れの日にはドッジボールや鬼ごっこ、雪が降った日には雪遊びなど、気候や運動場の様子に合わせた遊びをする児童が多く見られた。	A	・評価は妥当である。 ・今年度は若葉小はコロナやインフルエンザ等の流行があまり見られなかった。学級閉鎖をする学級もなかった。次年度も油断することなく感染対策を徹底しながら学校行事を推進してほしい。 ・地域でもまちづくり推進センターのグラウンドや公園でも元気に遊ぶ姿が見られた。
	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に良い食事をしている」児童生徒80%以上 ○朝食をとって登校する児童生徒80%以上	・生活状況調査、食に関する意識調査を実施する。 ・保健だよりを発行する。 ・給食委員会や保健委員会と連携して望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成児童の取組を推進する。	B	・5年生を対象に食事・健康に関する意識調査を、全校児童に「早寝・早起き・朝ご飯」調査を行い、指導した。児童自らが関心をもって取り組むことができた。 ・給食委員会では、食に対する意識や関心をもってもらうため、「先生達の好きな給食メニュー」アンケートを実施した。	B	・全国学校給食週間の取り組みとして、給食委員会が中心となって給食の始まりや給食センターについて調べた。また、日頃、疑問に思っていることを栄養教諭にインタビューし、調べたことともに、まとめて掲示し、給食について関心をもたせることができた。 ・各クラスでの指導のおかげで、高学年の残食は少なく、おいしい給食を作っていただいた調理員さんや生き物の命に感謝しながら、きれいに食べることができた。	B	・評価は妥当である。 ・生活のリズムが崩れている子がいる。地域でも公園や施設でゲームを長時間している姿をよく目にする。 ・朝起きれなくて遅刻し、登校時車で送ってもらい路上で乗り降りしている場面をよく見かける。安全な方法で送迎するよう保護者に周知徹底する必要がある。
	○望ましい生活習慣の形成	○自分から進んであいさつをしている児童の割合80%以上を目指す。	・1年間の生活目標を「あいさつにあふれ、落ち着いた学校にしよう」とし、「合言葉」の「あかるく・いつでも・さきに・つづけて」の周知・徹底を図る。 ・あいさつについて学期ごとの具体的な目標を示す。 ・児童会・PTAが連携した朝のあいさつ運動を展開する。 ・年に2回生活点検を行い、生活習慣の見直しを行う。	B	・校内で自らあいさつをする児童、地域の方に明るくあいさつをする児童が増えてきた。しかし、個人差が大きいのが課題である。 ・定期的な生活点検だけでなく、日常的に児童と接する中で見えてくる課題や良い点を共有する場を意図的に作ることで全職員で共有し、共通指導する体制ができてきた。 ・今年度「あいさつ」ののぼり旗を作成して各区分長さんやまちづくり推進センターにも配布し公民館等に掲示し、地域ぐるみであいさつを盛り上げるようにお願いした。	B	・児童アンケートでは、「自分からあいさつしている」と答えた児童が87%であった。児童会の提案や取組、教職員の意識付けにより、自分からあいさつをしようとする児童が増えてきた。 ・校内での児童の様子は、学期前半より落ち着いてきた。一方で、地域での過ごし方のルールを守っていない事案がいくつかあり、学級や学校全体で繰り返し指導を行った。	B	・評価は妥当である。 ・今年度からあいさつ旗を作成し、区長会で地域の公民館に立てることを確認した。学校だけでなく、地域でも明るいあいさつを広げるよう心がけ、その成果が出ている。 ・学校と地域との交流を深められる機会が少しずつ増えてきたので嬉しく思っている。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●月の時間外在校等時間が45時間を超える職員の割合15%未満を目指す。	・毎週金曜日を定時退勤日とし、それを逆算して仕事を効率的に行うような意識づけを行う。 ・勤務の効率化を行うために、職場環境の整備や学校行事の見直しを行う。	A	・職員から業務10%削減の案を募り、行事や取組の精選・廃止を行った。 ・職員会議や連絡会でも随時働き方改革を促した。その一環として校時表の見直しを行い、職員の放課後の時間を確保した。その結果昨年度と比較して超過勤務時間が減っている。	A	・昨年度と比較して毎月の超過勤務時間は減少しており、効率的に業務ができていた。毎週金曜日の定時退勤日はほぼ17時30分を守れている。月の時間外在校等時間が45時間を超える職員の割合6%未満であった。 ・更なる勤務の効率化を行うために、次年度も職場環境の整備や学校行事等の見直しを行う。	A	・評価は妥当である。 ・先生たちはたくさん業務があると思うが、計画的に業務をこなして夜遅くまで居残りがないようにして、心身共に健康で笑顔で子ども達の指導にあたってもらいたい。
	○年次休暇取得の啓発	○長期休業中の目標年休取得日数の達成率80%以上を目指す。(夏季休業中10日以上・夏休含む)	・長期休業中の目標年休取得日数を具体的に示す。 ・教務と連携し、長期休業中の行事や研修会の精選、集中的に行う期間を設ける。	A	・夏季休業中は、行事や研修を集中的に行う期間を設けることで、年休が取りやすくなった。 ・夏季休業中は、目標年休取得(夏休含む)日数(10日以上)を示し、96%を超える達成率であった。	A	・冬季休業中は、行事や研修を入れず年休が取りやすくなった。 ・県が目標にしている年間の年休取得日数14日以上は76%を超える達成率であった。 ・次年度も教務主任と連携し、長期休業中の行事や研修会の精選、集中的に行う期間を設ける。	A	・評価は妥当である。 ・楽しい職場の雰囲気づくりに努めてほしい。 ・PTAの行事についても見直しできるところは見直していきたい。
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した教員80%以上	・特別支援教育に関する研修会を実施する。 ・ケース会議の開催、SCやSSWや放課後デイサービス等の関係者間での情報共有を行う。 ・毎月ひまわり部会を実施する。	A	・夏期休業中に研修会を行い、特別支援教育の専門性について研鑽を積むことができた。 ・職員連絡会内で情報共有を行い、ケース会議等に繋げることができた。また、職員のみならず、放課後デイサービス等の関係機関とも連携することができた。 ・隔週でひまわり部会を行ったことは、職員間での情報共有や児童対応の相談の場として有効であった。	A	・研修会後、クラスの特別支援教育の取り組みに生かすことができたと回答した教員85%以上であった。 ・職員連絡会や職員間の相談等で情報共有を行い、年間で10回程度ケース会議を行った。 ・次年度も計画的に研修会や情報共有を行い、引き続き特別支援教育についての専門性と意識の向上に取り組んでいきたい。	A	・評価は妥当である。 ・学校だけでなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、関係機関と連携をとりながら進めてほしい。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目									
重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
○教科「日本語」の充実	○教科「日本語」の実践充実	★保護者・地域等に対する教科「日本語」の授業公開学級率80%以上 ★保護者等に対する教科「日本語」に係る情報を年間3回以上公開した学級率80%以上	・保護者や地域の方々の理解を図るために、全学級で年間を通して1回以上、授業参観等を実践する。 ・教科「日本語」の学習内容等を学級通信等で知らせる。	B	・教科「日本語」の保護者を対象とした授業公開学級率は70%であり、年間計画に基づいて計画的に実践できている。授業参観等で実践したクラスは学級通信等でお知らせできている。 ・各学年において、教科「日本語」の学習で積極的にタブレット端末を活用することができている。	A	・保護者や地域等に対して、教科「日本語」の授業公開を実施した学級は83%で、目標を達成できた。 ・保護者等に対し、学級通信等で教科「日本語」に関する情報発信を行った学級は100%であった。	A	・評価は妥当である。 ・授業参観で授業が見れたのでよかった。 ・学級通信や学校便りやホームページ等で情報発信があり、児童のがんばりが伝わった。
○児童の主体的な取組の推進	○学級活動や学校行事等子どもの出番・役割の設定 ○学級会を主軸に置く特別活動の取組	○学校行事の準備や計画、進行などを児童にまかせ、できるだけ多く子どもの出番・役割を設定し、主体的な取り組みをしているという児童を90%以上にする。	・代表委員会を通して児童の思いを反映させた取り組みを行う。 ・集会や児童朝会、運動会の進行や準備などで子どもの出番・役割を設定し、主体的に活動に取り組ませる。 ・縦割り班での縦割り活動やあいさつ運動を年間を通して行い、児童に計画・立案・運営させる。 ・常に考える教育を推進し、小集団での話し合い活動を行う。	B	・運動会に向けた代表委員会では、盛り上げる工夫を出し合い、中央廊下に運動会通りやカウントダウンカレンダー、また、学級旗をつくるなど児童の思いが溢れる取り組みを実行することができた。 ・運営委員会の挨拶運動、集会委員会の歓迎集会、体育委員会の雨の日体育館遊び、図書委員会の図書館まつりなど各委員会で児童が企画し運営する活動を行うことができた。 ・運動会では、高学年を中心に準備や後片付け、当日の運営など、役割を分担し活動することができた。	A	・6年生を送る会に向けた代表委員会では、5年生を中心に計画的に実施することができ、活発な話し合いを行うことができた。 ・各学級や各委員会、学校行事で生き生きと児童が活動する姿がたくさん見られた。 ・保護者へ児童のがんばりを通信等で伝えることができ、「子どもたちの出番・役割を設定し、主体的な態度を育てる取り組みをしている」と思う保護者が90%以上であった。	A	・評価は妥当である。 ・中央渡り廊下の子供たちの掲示物を見ても伸び伸びと進んで活動している様子が感じられ、主体性が育ってきていることがよく分かった。 ・子供たちの成長のために学校がいろいろな活動を通して体験や経験を積ませてほしい。

	○コミュニティスクールを中心とした学校・家庭・地域の連携	○学校の課題解決に向けコミュニティスクールを中心とした学校・家庭・地域の連携を図る。保護者アンケートで、学校は家庭や地域と連携しながら学校の課題解決に取り組んでいるという割合を80%以上にする。	・PTAとの連携を図り、学校の実態に合わせた各委員会の取組や教育講演会を実施する。 ・コミュニティスクールにおいて学校の課題解決について話し合い、PDCAサイクルで課題解決に向けた実践を行う。 ・教師より地域と連携した学習において支援してほしい内容を募り、実践につなげる。	A	・家庭での子育てや学校での児童の支援に生かせる内容を考え、PTA教養委員会と連携し、講師を招聘して教育講演会を実施した。 ・学校運営協議会において、学校や地域での児童の様子について情報交換をしたり、危険箇所や行事等の取組についての共通理解を図ったりした。 ・クラブ活動の支援や指導、定期的な読み聞かせ活動など、児童の学びに地域の方々が多く関わってくださった。	A	・学年委員主催の親子レクリエーション、父親委員主催のもちつき会など、児童が楽しめる行事を企画・運営してもらい、JAなど地域の方の協力も得ながら実施した。 ・学校と地域で共有した情報を基に、通学路合同点検等を行い、児童の安全を守るための方策を講じた。 ・かけ算の習熟や、生活科の昔遊び・風作り、図画工作の木工制作活動など、様々な教科に渡って、地域の方の協力と支援を得て、学習を充実させることができた。	A	・評価は妥当である。 ・親子レクリエーションやもちつき会等、学校・家庭・地域が連携した取組が行われたのがよかった。 ・行事を通して、先生方と保護者の交流も深めていきたい。
●・・・県共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育									
5	総合評価・次年度への展望	・校内研において「自立した学習者」を目指して、1人1台端末を活用した授業改善を進めた。研究授業やICTミニ研修会等を通して教師や児童の1人1台端末のスキルが向上し、授業改善につながっている。次年度も更なる活用を進めていく。 ・昨年度よりいじめの認知件数が増えた。毎月の生活アンケートやいじめに関する研修を実施し、いじめが起これにくい集団づくりに継続して取り組む、いじめの早期発見、早期対応、再発防止を心がけ、児童が安心して過ごせる学校づくりを目指していく。 ・児童の主体的な態度に対する承認・称賛を行うため、積極的・継続的に児童が活躍できる場や機会を増やしていく。また、家庭・地域にも連携を働きかけることで多面からも承認・称賛を行い、児童の自己肯定感を高めていく。 ・来年度は特別支援学級の在籍人数が増える。特別支援学級在籍以外でも、通級指導教室に通ったり、通常学級で特別な支援を要したりする児童もいる。なお一層の特別支援教育の充実が必要である。そのために保護者の願いに寄り添い、一人一人の教育的なニーズに応じた指導・支援を行っていく。 ・学校の様々な課題の解決に向けて、コミュニティスクールにおいて学校・家庭・地域が連携した取組を行う必要がある。今年度は学習支援や地域との交流に重点を置いて進めることができた。今後も保護者や地域の方の声も聞きながら有意義な取組となるよう熟議を行っていく。							